

美しき土塊 仁風閣のフラクスマン・タイル再考

和田綾子*

Beauteous Clay: Revisiting Flaxman Tiles in Jinpukaku (Tottori, Japan)

WADA Ayako *

キーワード：アイザック・ブルーム，ヴィクトリアン・タイル，アメリカン・アート・タイル，フラクスマン・タイル，仁風閣（鳥取市）

Key words: Isaac Broome, Victorian tiles, American Art tiles, Flaxman tiles, Jinpukaku (Tottori, Japan)

1. はじめに

重要文化財仁風閣（図1）の御座所の暖炉には，美しい男女の浮き彫り（レリーフ）タイルが用いられており（図2，3），説明板には「当時世界的に著名なイギリスの陶芸家フラクスマンの作品」との説明がなされていた。私のこれらのタイルへの関心は，まず，私が専門とする William Blake（1757-1827）と親交のあった John Flaxman（1755-1826）の作品が，意外にも身近な所にある可能性を知ったことで興味を掻き立てられたことに端を発しているが，それが長く持続したのは，それらの男女のレリーフ・タイルに，誰であるにせよ，アーティストの関与の可能性を認めたからに他ならない。私の当初の関心は，これらの「フラクスマン・タイル」が作られて一世紀程の間に辿ったであろう経歴にあったが，ジョン・フラクスマンの作品と，アンティーク・タイルの二方向から調査を進めて行く内に，これらのタイルがそもそもジョン・フラクスマンの作品であるかどうかを問い直すことになった。本稿では，まず，仁風閣の御座所の男女のレリーフ・タイルがフラクスマンの作品と見なされることとなった経緯に触れた上で，その根拠となった「FLAXMAN」の刻印の意味を明らかにしたい。そして，最終的に同タイルの真の塑像製作者（モデラー）を特定するに至った調査結果を順を追って示したい。

2. 仁風閣のフラクスマン・タイル

仁風閣は，周知の通り，池田仲博侯爵が，当初は池田家（旧因幡鳥取藩主）の別邸とするために片山東熊に設計を依頼していたものを，嘉仁皇太子（後の大正天皇）の鳥取行啓の際の御座所に用いるために，1907年（明治40年）に急遽，建築させたものと言われている。この鳥取で初めての本格的な明治の洋風木造建築の設計にあたった片山は，赤坂離宮（現迎賓館）を始めとして奈良国立博物館や京都国立博物館など，数々の名建築を手がけている。行啓後の仁風閣は，様々な用途に使用される一方で，通常の老朽化に加えて鳥取地震（1943年）の被害を受けるなどして荒廃が進ん

*鳥取大学大学教育総合センター

だが、再三の解体の危機を乗り越えて1973年に重要文化財の指定を受け¹、その翌年からの二年間に保存修理が行われている。仁風閣についての重要な資料は、その際に作成された『重要文化財仁風閣保存修理工事報告書』(1976年、鳥取市教育委員会)と、秋山英治著の『仁風閣物語』(1983年)である。後書は、秋山が仁風閣の保存修理工事末期から公開初期の3年間に渡って鳥取市教育福祉振興会を通じて仁風閣に関与し、自ら見聞し調査したことをまとめ上げたものである。氏は、同書の前置きにおいて以下のように述べている。

仁風閣は、本来不明なことが多く、修復工事の段階での調査によって明らかになったり、また、憶測によって輪郭がうかがわれるといったことが多々あります。それゆえに、この段階でのいきさつこそが極めて重要な意義があることとなります。言いかえれば、このことによる追認識によって、仁風閣の真相が把握されることになろうと思います。(秋山15)

秋山が仁風閣の特徴の一つとして挙げたのは、暖炉の多さである(秋山44)。現在でも八箇所暖炉が設置されているが、修復工事で壁が剥がされて判明したのは、当初は十五箇所にその設置が計画されていたことである(場所については、伊藤19参照)。氏は、外国の資材調達の都合と建築期限厳守との兼ね合いから暖炉の数が減らされたと推測している。この伝統的な日本建築にはない暖炉の存在については、『西洋館デザイン集成』の中で、藤森照信は以下のように説明している。

ヨーロッパの暖炉は、当初は実用によって発達したのであったが、そこが生活の収束点になるに従い、部屋の中の中心としての地位を獲得するようになる。こうなると、ただ暖かければよいではなく、さまざまに飾りたてられ、部屋の中で一番大事な場所になった。つまり、<ヨーロッパの暖炉は日本の床の間に当たる>ということになったのである。

暖炉の床の間への譬えには違和感がつきまとうが、それは、藤森が自ら指摘しているように、暖炉が人の集う中心としての役割を担っているからである。しかし、その譬えは、西洋の暖炉が現在、実際に使用されているかいないかに拘わらず、(居間兼)客間の中心的装飾物として存在していることを日本人が理解するには役に立つ。なぜなら、「家は夏をもって旨とする」日本においては、洋風建築といえども居間や客間に敢えて暖炉を造ることはほとんどないからである。しかし、この例外が、明治・大正期の本格的洋風建築であり、仁風閣はその代表格と言える。

藤森は、暖炉の四つの構成要素について説明している。その中でも基本的な三要素は、まず、耐火煉瓦を積んだ炉の部分であり、次にその前面に取り付けられた鉄製の枠、庇、障立であり、そして一番外側にある左右の柱状の枠とその上に取り付けられた上部の棚である(藤森15)。藤森が、もう一つ言及したのは、以下の装飾的要素である。

こうした炉に近いところの金物のもう一回り外側で注目に値するのがタイルである。この部分は、炉およびそれに直結した金物と一番外の枠との間にあたり、石で作られている場合や木で作られている場合もあるが、なんといっても派手で目立つのはタイル、それも絵タイルを貼った時である。... さらに一きわ群として目立つのがアール・ヌーヴォーの香りを伝えるヴィクトリアン・タイル。(藤森15)

イギリスのヴィクトリアン・タイルの装飾が暖炉の構成要素として敢えて言及されていることは、その施工例が多く見られる明治期の風潮を如実に反映していると言える。なぜなら、当時は、既に産業革命による技術革新を経た同国が、主として機械によって量産されたタイルで世界市場を席捲しており、そして、それらのタイルが、当時のアーツ・アンド・クラフツ運動の流れを受けて、美しい工芸品と化していた時代であったからである。

仁風閣の修復された八つの暖炉の中で、現在、飾りタイルが施されているのは、二階の御座所と御寝室の暖炉だけである。²『重要文化財仁風閣保存修理工事報告書』(78)と『仁風閣物語』(46-47)によると、御座所の暖炉のタイルは、奇跡的に鳥取地震にも耐えて全て当初のまま残っていた。その中でも特に注目すべきは、男女の肖像レリーフ・タイルである。これらは、修復時にはがされた時、「FLAXMAN」という刻印が、それぞれのタイルの裏面に発見されたことが『重要文化財仁風閣保存修理工事報告書』(88)に記されている。この刻印には以下のような解釈が加えられている。

修復にあたってはがしてみたところ、男女一対の肖像画の裏には FLAXMAN と鮮やかに刻印があった。イギリスの著名な彫刻家の名前である。このタイルは、そのジョン・フラクスマン(一七五五～一八二六)の作品とみてよかろう。このことを証明するものはないが、専門家によればまず間違いはない。(秋山80)

秋山は、フラクスマンが、陶芸家 Josiah Wedgwood (1730-95)の会社で、デザイナーとして働いていたことと、詩人であり画家のブレイクと親交があったことに言及した上で以下のように続けている。

いずれにせよ、一世紀半も前にいたイギリスの著名な彫刻家の作品が、文明開化の明治に海を渡り、そして七〇余年たった今も、極東の地方都市の建物の中に、ひっそりと煉瓦にはりついて無事でいたということになる。門外漢でも心を惹かれるものがある。(秋山81)

仁風閣のこの男女のレリーフ・タイルは、『ヴィクトリアンタイル・装飾芸術の華』(79-80)や『日本タイル博物誌』(68-69)にも大きく写真掲載されており、国内で他に施工の例が見られないものである。前書では、それらがジョン・フラクスマンの作であるという説を取りあげた上で、「定かでない」(79)としているが、後書は、「J. フラクスマンの作と見なされている」(69)と記述している。しかし、フラクスマンがウエッジウッド社のデザイナーをしていたのは、1775年から1787年頃のことであり、秋山が気付いていたように仁風閣が竣工した1907年との間には、一世紀以上の不自然とも言える隔たりがあるのである。

3. 登録商標としての「FLAXMAN」

仁風閣の男女のレリーフ・タイルがジョン・フラクスマンの作と見なされるようになったのは、「FLAXMAN」の刻印ゆえである。しかし、それは作者を示すものではなく、タイル会社の登録商標を示している可能性が、同じ刻印を持つ他のタイルの存在によって出て来たのである。著者が収集したタイルの中に、仁風閣の男女のレリーフ・タイルと同じく、非常に稀な「FLAXMAN」の刻印を持つ男女のレリーフ・タイルが存在する(図4,5)。これらと同じデザインの男女のタイルは、

Terence A. Lockett の *Collecting Victorian Tiles* に掲載されており(178),³ ロケットは、同刻印は、以下のように、恐らくイングランド中部のスタフォードシャーのロングトン(Longton)にあったフラクスマン・タイル・ワークス(Flaxman Tile Works)のものであると述べている。

Flaxman Tile Works, ? Longton, c.1890-1930?. No documentary record has been found, but oral information has been supplied for the tentative dates. For examples of the wares see Plate 48 (273 and 274). Mark: 'FLAXMAN', moulded. (Lockett 57)

他方、英国の商標辞典で調べてみると、この「FLAXMAN」の商標を用いていたタイル会社は、Wade, Heath & Co. (1927-)となっている(Godden 251)。これによると、同社は、同じスタフォードシャーの中でもロングトンではなく、パースレム(Burslem)にあったとされている。確かに同辞典に幾つか載せられた登録商標の中に「FLAXMAN」の文字があるが、それは、1939年頃のもので、二十世紀初頭の例ではない(Godden 640)。この Wade, Heath & Co. は、以前は、Wade & Co. (1887-1927)であったと記載されているが、こちらには、「FLAXMAN」の登録商標についての言及はなされていないので、これらの事実のみでは、仁風閣の男女のレリーフ・タイルの裏の刻印が登録商標であると結論づけることは難しい。この問題を解決してくれたのが、ストーク・オン・トレント(イギリス窯業の一大中心地)の公文書図書館(Hanley library)で入手した現在のウェイド社の1824年から今日までの複雑な沿革についての資料である。これにより、Wade & Co. が、当時世界でも隆盛を誇っていたイギリスのタイル製造に J. & W. Wade & Co. の会社名で参入したのが1888年であり、この成功により、1891年には、自社(J. & W. Wade & Co.)に隣接する製陶会社の建物を買い取って、そこに「フラクスマン・アート・タイル・ワークス(Flaxman Art Tile Works)」という工房名を付けていたことが判明したのである(Wade Collectors Handbook 7, 14)⁴。つまり、「FLAXMAN」とは、J. & W. Wade & Co. におけるタイル工房(Flaxman Art Tile Works)の名称で、それが登録商標としてそこで製作されたタイルに付けられたものであった。しかし、この登録商標には、J. & W. Wade & Co. がウェッジウッド社を強く意識していたことが窺える。なぜなら、J. & W. Wade & Co. のあるパースレムは、ウェッジウッド社の創業者であるジョサイア・ウェッジウッドの生まれ故郷であり、そのウェッジウッド社の(カメオ風の浮き彫りの装飾を持つ)ジャスパールウェアの塑像製作者である、芸術家ジョン・フラクスマンに因んで「フラクスマン・アート・タイル・ワークス」の名がつけられていたからである(Wade Dynasty 36)。

4. ヴィクトリアン・タイル

これまでに明らかになった事実を整理すると、仁風閣の男女のレリーフ・タイルは、イギリス製で、スタフォードシャーのパースレムにあった J. & W. Wade & Co. が、そのタイル工房(Flaxman Art Tile Works)で作り、その登録商標である「FLAXMAN」をタイルの裏に刻印したものであるということになる。それでは、これらのタイルの塑像製作者(モデラー)は誰なのであろうか。この問いに答える前段階としてまず必要となったのは、イギリスのタイルについての調査である。

仁風閣の男女のレリーフ・タイルが実際に作られたのは、フラクスマン・アート・タイル・ワークス(以下、フラクスマン・タイル工房と記す)が設立された1891年から仁風閣が竣工した1907年の間と考えられる。1907年の英国は、既にヴィクトリア朝(1837-1901)を過ぎていたが、1910

年代までのイギリスの装飾タイルはヴィクトリアン・タイルの流れを汲んでいることから、ヴィクトリアン・タイルと分類されている（『世界のタイル・日本のタイル』43）。つまり、仁風閣の男女のレリーフ・タイルは、日本の他の明治期の本格洋風建築の多くに用いられている暖炉の装飾タイルと同様にヴィクトリアン・タイルとみなされるのである。以下において、タイルの四千年以上の長い歴史の中でも、その製造に機械を導入したことで一線を画したイギリスのヴィクトリアン・タイルの特性を浮き彫りにしたい。

イギリスのタイルは、13世紀後半に教会や王宮の床を飾ったモザイク・タイルが最初とされる。モザイク・タイルは、古代ギリシャ・ローマの大理石のモザイク装飾を起源とするが、大理石をあまり産出しないヨーロッパ北部（フランス）で12～13世紀頃に発明されたものである（『ヴィクトリアンタイル・装飾芸術の華』33-39）。他方、イギリスで錫エナメル釉の装飾タイルが作られたのは、16世紀の中頃以降で、フランドル地方の陶工の移住による。⁵ 長く、オランダ産のタイルの品質にはかなわず、1676年のタイル輸入禁止令や輸入タイルの高価さにも拘わらず、同国からのタイルの流入が続いていた。こうしたイギリスのタイルが、やがて世界のタイル市場を席捲するようになったのは、世界に先駆けて産業革命による機械化と量産化が図られたことによる。その中でも特に大きな転換をもたらしたのは、それまで、全て手描きであったタイルの絵付けが、1750年代の John Sadler と Guy Green による銅版転写法の発明によって大幅に時間短縮が図られたことと、1840年に Richard Prosser によって陶ボタン製造のために発明されたねじプレスによる粉末圧縮法が、Herbert Minton（1793-1858）によってタイルの製造に応用され、タイル素地の量産に道を開いたことである（Van Lemmen, *Victorian Tiles* 13-14）。⁶

ヴィクトリアン・タイルの大半を占めるのは、トランスファー・プリンティング（転写印刷）によって絵付けをされたタイルである。これらが生産されるにあたっては、大きく分けて、バスケットと呼ばれるタイル素地を焼く工程と、それに装飾を施す工程があり、タイルの膨大な需要に応えるべく効率が優先された結果、これらの工程を別々のタイル会社が行うことが多かった。これが、多くの転写印刷によるヴィクトリアン・タイルの裏面に登録商標がついていない理由である。例えば、ウェッジウッド社が作ったタイルのほとんど全てが転写印刷タイルで、その多くに登録商標の刻印がついていないのは、恐らく他社の製造したタイル素地を使っているからであると Julian Barnard は指摘している（Barnard 81）。ただし、ヴィクトリアン・タイルには、他にも、イギリス中世のタイルの復刻版である象嵌タイル、浮き彫り（レリーフ）タイル、様式美を特徴とするアール・ヌーヴォー調のチューブライニング・タイル等があり、それらの製造のために、一つのタイル会社がタイル素地の製造と装飾の双方を兼ねることも決して少なくはなかった。⁷

この時代のタイルが、機械の使用によって大量生産されることになったことに反発する動きもあった。John Ruskin（1819-1900）の信奉者で、19世紀後半から20世紀初頭のアーツ・アンド・クラフツ運動を主導した William Morris（1834-96）は、真の芸術は機械を排除した手仕事によるべきだとして、わざわざ、絵付けするためのタイル素地も手作りのものを求めて、オランダから取り寄せるという徹底振りをみせている（Barnard 118）。（ただし、タイル素地を自ら形成して焼くことはせず、タイル製造上の分業は受け入れている。）William Frend De Morgan（1839-1917）は、この運動における中心的なタイル・デザイナーで、手描きのタイルの絵付けで名高いが、機械で作られたタイル素地を嫌いながらもそれを完全に排除していたわけではなかった（Barnard 119）。このようにヴィクトリアン・タイルは、機械で工業的に生産されるものから、手描きで絵付けされるものまで多岐に亘るが、バーナードが指摘するように、前者ですら、タイル素地の形成と装飾のため

に少なくとも2回、多いものでは4回程度の焼成を要したこと、デザインは転写印刷でも彩色は手作業によること、釉薬の仕上がり具合はタイル素地の成分や炉の温度管理に依ったことなどから、かなりの手間と職人芸を要するものであった (Barnard 79-80)。実際、同一デザインの転写印刷のタイルでさえ、印刷に用いられる色や彩色によって、驚くほど印象を異にしており、そうした個々のタイルの持つ違いがヴィクトリアン・タイルの魅力とも言える。

仁風閣の御寝室の暖炉には、転写印刷によるヴィクトリアン・タイルの極めて美しく洗練された作例が見られる(図6,7)。この御寝室の暖炉のタイルは、保存修復工事前には全て脱落し、一旦、廃棄されてしまっていたが、その後回収されて保管されていた三枚(小鳥の模様のタイル二枚と水仙の模様のタイル一枚)と、発掘された一枚(水仙の模様タイル)とを合わせて、四枚の当初からのタイルが現在の暖炉の飾りに使用されている(秋山76-77)。更に、水仙の模様のタイルと対になるが、三つに割れて出土したグリフィンと壺絵の模様のタイルの複製品二枚と、御座所の暖炉の縁飾り(ボーダー)タイルの複製品を加えて、御寝室の暖炉が修復されている(秋山77)。これらの小鳥の模様のタイルと水仙とグリフィンの模様の対のタイルは、双方とも美しく手彩色が施されており、裏に商標の刻印がなく、まさにヴィクトリアン・タイルの典型と言える。

では、仁風閣の御座所の男女のタイルのようなレリーフ・タイルは、どうであろうか。バーナードによると、転写印刷のタイルは、その表面の平坦さ故に壁紙と競合し、マジヨリカ・タイル(透明・着色釉薬のかかったレリーフ・タイル)が、やがて工業的に生産されたタイルの中で最も人気を集めたため、1900年以降のイギリスでは、大多数のタイルがこの方法で製造されていたという(Barnard 81-82)。つまり、タイルには、次第にその素材を生かした立体表現が求められて行ったのである。ところが、同じ浮き彫りタイルとは言っても、イギリスでは、男女の対のレリーフ・タイルをほとんど見かけることはない。実際、そうしたデザインが人気を博していたのは、アメリカの方で、それも1870年代半ばから1890年代においてである。更には、先に取り上げた「FLAXMAN」の刻印を持つタイル(通称ミケランジェロ[図4])と同一のデザインのタイルがアメリカのProvidential Tile Works (Trenton, New Jersey 1886-1913)(以下、単にプロヴィデンシャル社と記す)から出されていることがわかった(図8,9)。仁風閣の男女のレリーフ・タイルの塑像製作者が特定されるために必要となったのは、意外にもアメリカのタイルについての調査である。

5. アメリカン・アート・タイル

イギリスにおいて、特にヴィクトリアン・タイルの美しさが再発見され、博物館にタイルが美術品として陳列され、個人収集家が増え始めたのは、バーナードの *Victorian Ceramic Tiles* の出版された1972年以降のことであるといわれている。このヴィクトリアン・タイルについての主要な研究書の一つの章が、アメリカン・アート・タイルに関して割かれていることは、注目に値する。なぜならば、それは、アメリカのタイルが、質量共に到底、無視できぬレベルに達していたことについてのバーナードの認識を示しながらも⁹、この時期には、まだ、アメリカのどのタイルがどの会社の誰によって作られたかはほとんど知られておらず、それらが、単にヴィクトリアン・タイルの範疇にあるとみなされていたことを如実に示すものだからである。⁹

アメリカで自国のタイルが特に注目され始めたのは1970年代末頃からのことであるが、¹⁰ 当時はまず、それらをヴィクトリアン・タイルの一部と見なすのではなく、独立した存在として提示する試みから始められなければならなかった。例えば、早期のアメリカの装飾タイルの展覧会の一つ

は1979年に開かれているが、その展覧会カタログの冒頭で、Thomas P. Bruhn が、「16世紀においてはドイツ、17世紀においてはオランダ、18世紀においてはイギリスのタイルが、それぞれ秀逸なもの一つに数えられるが、これらの数十年の間（1870年から1930年）のアメリカのタイルは、その最上のものに比肩する」と述べている（Bruhn 6）。彼は、「アメリカの装飾芸術において、タイルが唯一、重要な役割を演じた」という60年を以下のように分析している。

The dividing line lies approximately at the year 1900. At this time three significant changes occurred. One is the general replacement of raised relief designs by painted or molded decoration flush to the surface of the tile. Second is the displacement of tinted, translucent glazes by mat glazes or a mat finish as well as by a variety of other glazing techniques. Third is the insistence, real or illusory, by many of the potteries, on hand craftsmanship. (Bruhn 9)

つまり、アメリカのタイルは、1870年から1930年までの間で、大きく二つに分けられる。まず、1870年から1900年までが、ヴィクトリアン・タイルの影響が色濃い時期であり、この時期に主流となるのは、乾式粉末圧縮法により作られた、浮き彫りで透明の着色釉薬がかけられたタイルである。しかし、20世紀に入って人気を博したのは、16世紀のスペインで用いられていたクエンカ法（型押しをして、模様の輪郭線を畝のように残し、艶消しの色釉を注ぎ、表面を平らにしたもの[『タイル・アート』46]）などを用いた手作りタイルである（作例は、Karlson, *American Art Tile* 20-23, 79-83参照）。¹¹ このように、アメリカン・アート・タイルは、通常、ヴィクトリアン・タイルの延長線上に位置付けられる前者と、タイルの総生産量は少ないものの、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響下でアメリカの真骨頂が発揮されたとみなされている後者の二種類に大別されている。しかしながら、前者も、その製造会社がアート・ポタリーの系列に属しており、そこでは、様々な分業が行われ、機械も使用されてはいたが、特にヨーロッパで研鑽を積んだアーティストによって各人固有の芸術的表現が追求された結果、優れたレリーフ・タイルが多数生み出されていたのである（Bruhn 6-7）。本稿で注目して来たイギリスの「FLAXMAN」の刻印を持つ老人を描いたタイル（通称ミケランジェロ）と同一のデザインのタイルを出していたプロヴィデンシャル社が属しているのは、前者の系列である。

6. アイザック・ブルーム

イギリスのフラクスマン・タイル工房とアメリカのプロヴィデンシャル社が、全く同じデザインのタイルを出しているもう一つの注目すべき例が存在している。それは、仁風閣の男性のレリーフ・タイルが、プロヴィデンシャル社からも出されていたという事実である（図10, 11）。ここで、イギリスとアメリカのどちらのタイル工房が先に同タイルを出しているのかが問題となるが、同じデザインのタイルでも最初に作られたものの中には、表に塑像製作者（モデラー）の署名が残されているものがあることから、その場合はモデラーが確実に特定可能となる。先のミケランジェロとしばしば呼ばれるデザインについて、プロヴィデンシャル社のタイルがオリジナルであることは、1979年のアメリカのタイル展のカタログに、プロヴィデンシャル社から出された同一のデザインのタイルが写真掲載されており（Bruhn 23, catalogue no. 146）、そのタイルの右下の隅に「BROOME 1886」と署名されていることにより明らかである。同様に、アメリカのプロヴィデンシャル社のタ

イルに焦点を絞ることによって、仁風閣の男女のレリーフ・タイルの塑像製作者も判明した。この二枚のタイルの内、女性のタイルについては、1983年の *The Antique Trader* (373) に写真が掲載されており、その詳細が明らかにされている。それは、プロヴィデンシャル社製のタイルであり、Isaac Broome (アイザック・ブルーム) の署名が残されていたのである。

アイザック・ブルーム(1835-1922)は、カナダ生まれでアメリカに移住したアーティストである。Barbara White Morse は、彼の業績は、「彫刻家、画家、塑像製作者、アメリカにおける石版印刷を用いた陶器製作の創始者、独自のガラス磁器の製作者、タイルのデザイナー、発明家、教師、人文・自然科学部長、研究者、教育と政治と産業の改革者、講師、著者、科学技術と工業技術の専門家」の14項目に渡り、87年の人生が創造的に活かし切られたと述べている(Morse 18)。ブルームが初めて名声を得たのは、アメリカでタイルが生産される大きな契機となったフィラデルフィアでの百周年記念万博(フィラデルフィア万博、1876年)にクレオパトラの胸像や白色磁器の瓶などを出品したことによる(Morse 19-20)。これらは、19世紀に製作されたこの種の作品の最上位クラスに属していると専門家は見ており(Morse 19)、この成功によって彼は、翌々年の1878年に、アメリカ政府とニュージャージー州の双方から、陶磁器部門の特別コミッショナーとしてパリ万博に派遣されている。ここで、彼のタイルのデザイナーとモデラーとしての業績に絞るならば、それらは、Trent Tile Co. (Trenton, New Jersey 1882-1939 [以下、単にトレント社と記す])、Providential Tile Works (Trenton, New Jersey 1886-1913)、Beaver Falls Art Tile Company (Beaver Falls, Pennsylvania 1886-1927 [以下、単にビーバー・フォールズ社と記す])の三社に残されており、それらの最も優れた作品の多くはブルーム作であると見なされている(Morse 21; Karlson 1998, 199; Sigafosse 53)。¹²ブルームは、トレント社に1883年から1886年まで、プロヴィデンシャル社に1886年から1890年まで、ビーバー・フォールズ社に1890年以降(いつまでかは不明)、それぞれ在籍していたが、各社は、ブルームが去った後も、彼の新しい作品も含めて、彼が残したデザインを使用して、タイルを長く製造し続けることが可能であった(Karlson 1998, 199)。特にブルームならではの作品は、人物の肖像レリーフ・タイルである。それらは、いずれも人間の柔らかく穏やかな表情が絶妙に捉えられていることを特徴とし、衣装や背景などの細部に至る非常に凝った表現も含めて、多々あるアメリカのタイル会社の他のアーティストの追隨を許さない。¹³イギリスのヴィクトリアン・タイルにおいては、ブルームのデザインが用いられている先のフラクスマン・タイルを除いては、その類の肖像タイルを目にするのは極めて稀である。

三社から出された多数のタイルの中で、どれがブルームの作品かはその特徴から凡そ見当がつくが、それらを確定するためには、先述したように彼の署名に頼らねばならない。初期のタイルには、彼の姓が大文字で「BROOME」と記されているものもあるが、より、頻繁に見られるのは、タイルのデザインの一部となっている大文字の「B」である。これは、Dave Ragoによると、ブルームのイニシャルであるIとBとが組み合わせられたものだと言う(*Antique Trader* 373)。ブルームの作品であることがわかっている例としては、これまでに挙げたプロヴィデンシャル社から出ている老人のレリーフ・タイル(図8)と仁風閣の男女のレリーフ・タイルの他にも、ビーバー・フォールズ社から出ている男女の対のレリーフ・タイル(図12)、トレント社から出ているレリーフ・タイル(図13, 14, 15)などが挙げられる。¹⁴

フラクスマン・タイル工房が、プロヴィデンシャル社から出された少なくとも二種類のブルームのレリーフ・タイルのデザインを用いていることから、同タイル工房側が、ブルームを高く評価していたことは容易に推察できる。プロヴィデンシャル社は、1890年にブルームが去ってから彼の

デザインの著作権を有していたはずであったことから、フラクスマン・タイル工房がこれらのブルームのタイルのデザインを使用できたのは、プロヴィデンシャル社からそれらの著作権を買い取ったのか、それともそれらの著作権が既に切れていたかのいずれかであると考えられる。¹⁵

バーナードは、アメリカン・アート・タイルは、ヴィクトリアン・タイルに比べれば「よりずっと、個性的」と述べている（Barnard 112）。これは、ヴィクトリアン・タイルの影響が強かったと言われる1870年から1900年の間に製造されたタイルも、工業的に生産されていたとは言え、実際、ブルームなどのアーティストの手によって塑像が造型されていた所以である。アーツ・アンド・クラフト運動を主導し、社会主義を標榜したイギリスのウィリアム・モリスは、機械による大量生産を排して、手仕事を尊重したが、特にタイルに限定して述べるならば、手仕事ゆえに価格が跳ね上がり、ごく少数の限られた富裕層のみに資することになってしまった。1900年までのアメリカン・アート・タイルは、アーツ・アンド・クラフト運動の流れに影響を受けつつも、逆に機械を使用することで庶民に美しい工芸品を提供し得たのである。¹⁶

7. 仁風閣の断片タイル（追記）

仁風閣は、重文指定を受けた翌年の1974年から約二年間をかけて修復工事が行われているが、この工事によっても完全に1907年の竣工当時の状態に復元されたわけではなかった。このことを秋山は以下のように言及している。

タイルについては、いまひとつエピソードがある。

修復工事も終わって、工事現場の清水建設の大きなバラックも撤去され、文化財建造物保存協会のプレハブ小屋だけが、前庭にぼつんと残っていた。同協会が残務整理を急いでいたころ、正門の脇の山裾で、多年にわたって寄せ集められていた土石の排除作業が進められていた。ショベルカーが掻きあげて整地していたが、技師たちが何かを探すかのように熱心に見守っていた。埋没資料を探していたのである。タイルの破片が続々発見された。技師たちは既に、搬出投棄した土石を追って十六本松（鳥取市郊外の千代川河口）まで出かけて、何点かの資料を探し出した。こうして、未知の二種類のタイルの破片が発見されたのである。...

こうして新しい疑問がわいてきた。しかし、いかんせん全ては終わったあとである。謎は表に出ることもなく工事は完了した。問題の破片は、仁風閣の倉庫に眠っている。

（秋山48-49）

修復工事完了後に発見され、現在は倉庫にしまわれている二種類のタイルの断片の写真是、「重要文化財仁風閣保存修理報告書」（77）に掲載されている。同報告書は、これらのタイルについて以下のように述べている。

...一種類のものは、断片から全体の図柄が復元可能であるが、他の一種類は、破片が少なく復元困難である。

少なくともこの内の二枚乃至三枚は今回の修理に不明のまま推定で充当した「御寢室」の飾りタイルの一部分に該当するものであろう。残余は「謁見所」暖炉のものであったのかも知れない。何れにしてもこれらのタイルに関しては工事完了後の発見であったので利用する

ことが出来ず残念であった。(68)

二種類の内の一種類は、典型的な転写印刷のヴィクトリアン・タイルで、手彩色が施されている。これは、上下左右対称のデザインであるので、確かに発見された三枚のタイルの断片から完全なタイルの復元が可能である。ただし、この復元タイルが、「御寢室」の二種類のタイル(小鳥の模様のタイルと水仙とグリフィンの模様の対のタイル)の真下に置かれるくらいなら、二種の断片タイルの発見が工事完了後であったことを喜ばねばならない。なぜなら、その場所には、本来、もう一枚の小鳥の模様のタイルが組み合わされるべきであって、全く図柄の異なる復元タイルを組み合わせたならば、全体のバランスが完全に崩れ、当初のものとは全くかけ離れたものになってしまっていたであろうからである。¹⁷ この断片タイルと同じデザインのタイルを入手したのでその写真を掲載しておきたい(図16)。また、復元困難とされているもう一種類のタイルについては、そのわずかの断片のデザインともう一種類のタイルに用いられていた意匠から、その全体像が判明した(図17)。¹⁸ これは、葉と花模様の美しい二枚組みのタイルで、完全復元可能な先のタイル二枚とで一つのセットになっており、左右で合計八枚となり、更にボーダー(縁飾り)タイルが使用されて、一つの暖炉を美しく飾っていたものと考えられる。現在、仁風閣で暖炉にタイル装飾が施されている場所が、(嘉仁皇太子をもてなした)御寢室と御座所であることを考えると、これらのタイルが用いられたもう一箇所とは、予想されていたようにそれらの部屋に続く謁見所以外ではありえないであろう。¹⁹

尚、これらと同一のデザインのタイルが暖炉の装飾に用いられた例が、実は国内に一箇所、現在も残っている。福岡県大川市の「旧三瀧(みずま)銀行本店」(大川市指定文化財)の一階ホール暖炉であり、この洋館は仁風閣と同様、明治末期に建てられたものである(『明治の洋館100選』101)。²⁰

8. おわりに

仁風閣は、2007年には、竣工して百年を迎える。可能であるならば、さらなる補修工事に道がつき、仁風閣が竣工当時の姿を取り戻すことによって、真にヴィクトリアン・タイルの宝庫となることが望まれる。ここで思い起こされるのが、建築史家で元東大教授である村松貞次郎の次のコメントである。「ヴィクトリアン・タイルを見て歩くツアーが実現するようにでもなれば、日本の近代建築は、今日よりもはるかに多くの関心を集め、芸術としての認識と評価を格段にたかめることができよう」(『ヴィクトリアンタイル・装飾芸術の華』63)。村松が同書の中でこのように述べてから、早二十年が過ぎたが、この間、日本にも世界に誇れるタイル博物館が1997年に愛知県常滑市に開館したことにより、ようやく人々のタイルへの関心が喚起される環境が整ったと言える。近い将来、明治の洋風建築を訪れる楽しみの一つが、その暖炉を飾る美しいヴィクトリアン・タイルとの出会いとなる時代が来ないとどうして言えようか。そして、その時にはヴィクトリアン・タイルの本場のイギリスにおいてさえも稀な、アイザック・ブルームがデザインした優れた男女のレリーフ・タイルと、華麗なヴィクトリアン・タイルの施工例が見られる仁風閣は、その花形となるに違いない。

図版

図4～5，図7～17のタイルは，和田個人の所蔵。仁風閣の縁飾り（ボーダー）タイルを除いて，掲載されているタイルはいずれも，6インチタイル（約15.24 cm × 15.24 cm）である。



図1.重要文化財仁風閣（鳥取市）



図2.御座所の暖炉（仁風閣提供の写真）

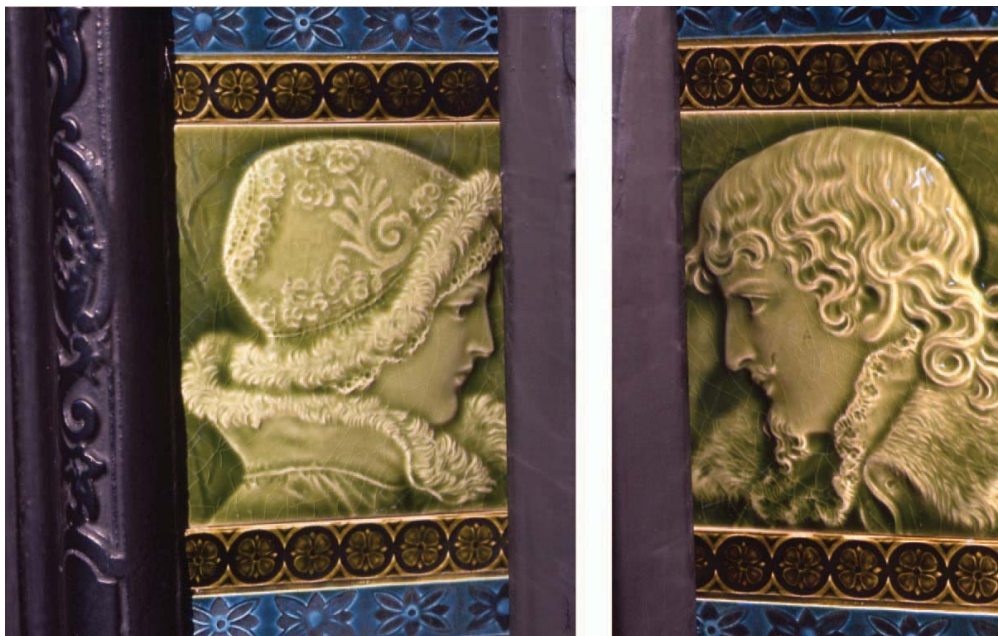


図3.仁風閣の御座所の暖炉に見られる男女の浮き彫りタイル（仁風閣提供の写真）。いずれも6インチタイル（正方形）であるが，長細く見えるのは暖炉の鉄製の枠の中にタイルの左右の両端が隠れているためである。



図4. 男女の浮き彫りのフラクスマン・タイル(男性の通称は、「ミケランジェロ」)



図5. 図4のタイルの裏の刻印



図6. 御寝室の暖炉のタイル(片側)



図7. 御寝室の暖炉のタイルと同じデザインのタイル



図8．プロヴィデンシャル社の「ミケランジェロ」 図9．図8のタイルの裏の刻印



図10．プロヴィデンシャル社から出された
仁風閣の男性タイルと同じデザインのレリーフ・タイル 図11．図10のタイルの裏の刻印



図12．ビーバー・フォールズ社製のブルーム作のレリーフ・タイル（Bのマークが両タイルの左下に見られる）



図13. トレント社から出されたブルーム作のレリーフ・タイル(本来のペアは釉薬の色が同一。ブルームの署名については, Sigafoose 221参照。)



図14. トレント社から出されたブルーム作のレリーフ・タイル(右側のタイルの左下にBの文字が見える。左側のタイルに残されたブルームの署名については, Morse 21参照。)



図15. トレント社のレリーフ・タイル(ブルーム作であると考えられている。 Morse 18, 20参照。)



図16. 仁風閣の断片タイルと同じデザインのタイル



図17. 左側の対のタイルが、ごく一部の断片が見つかったタイルの全体像

注

本稿の執筆にあたっては、仁風閣、大英図書館、The Victoria & Albert Museum、University College London Art Collections、Sir John Soane's Museum、Hanley library、鳥取大学附属図書館、鳥取県立図書館で調査及び資料収集を行った。特に仁風閣の柏木洋蔵所長を始めとする同職員の方々には、大変お世話になり、御座所の暖炉の貴重なネガを提供していただいた（このネガの図版への取り込みには、本論集の編集委員長である小玉芳敬先生がご尽力下さった）。また、UCL Art CollectionsのDr. Emma Chambersと同アシスタントのMiss Wenny Teoには、ジョン・フラクスマンの鉛筆やペンやエッチングによる夥しい数のデザインを見せていただいた。The Victoria & Albert Museumの陶磁器とガラスコレクション部門の学芸員であるMr. Alun Gravesには、貴重な助言をいただいた。最後に、本稿の図版に掲載された極めて稀少なタイルの収集は、夫の和田隆臣の協力なくしては不可能であった。ここに記して、謝辞とさせていただきます。

1. 仁風閣の解体の危機は、「まず、博物館新築移転の際、ついで市庁舎改築のおり、さらには市民会館新設のとき」（秋山26）の三度に及んだとされ、特にその三度目（1965年）においては、市議会でわずか一票の差により保存が決まっている。保存には、画家・郷土史家の川上貞夫を始めとする識者らの献身的活動があった（秋山27、伊藤14）。
2. 保存修理工事終了後に発見された二種類の断片タイルの存在により、実際は、もう一箇所の暖炉に飾りタイルが用いられていたことが明らかである。これについては、本稿の「7. 仁風閣の断片タイル」に詳しく取り上げた。
3. Lockettによる同書の同ページを最初に私に指摘したのは、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムの陶磁器とガラスコレクション部門の学芸員であるAlun Gravesである。氏は、仁風閣の男女のレリーフ・タイルの写真について、「見たことがないが」と断った上で、特に同タイルの裏の写真

に見られる凹凸について、「工業的に生産されたタイルの印」とコメントした。

4. 1950年代末には、より安いヨーロッパ大陸産のタイルの影響で、イギリス製造のタイル需要は激減し、同タイル工房は1970年にタイル製造を停止している (*Wade Collectors Handbook* 10, 16)。
5. 装飾タイルの歴史は古く、発見された最古の例は、古代エジプトの第三王朝・ジェセル王のピラミッド(紀元前27世紀)にまで遡り、中東においては、紀元前9世紀のアッシリアの施釉煉瓦や、紀元前575年頃のバビロニアの彩釉煉瓦によるライオンなどが浮き彫りされたイシュタル門への行列通り(ベルリンのペルガモン博物館蔵)などの例がある。その後、装飾タイルが復活し、建築装飾の華となるのは、9世紀以降のイスラム文化圏においてである。ヨーロッパには、711年以降イベリア半島南部を支配したイスラム教徒により伝播し、イタリアへは、特に1442年にナポリをアラゴン人が支配して以来、1530年ごろまでが、そのタイルの歴史上でも特に隆盛を誇った一時期となっている。オランダへは、16世紀に錫エナメル釉のマジョリカタイル(デルフトタイル)が伝播し、17世紀にタイルの黄金期を築き、それまで宗教寺院や王宮を飾っていたタイルは、中産階級の市民の家に用いられるようになっていく(タイル史の詳細については、Graves 7-84, 『世界のタイル・日本のタイル』12-37 参照)。
6. ただし、1800年から1830年の約30年間は、イギリスだけでなく、ヨーロッパにおいてもタイル産業は、極度に衰退していた。イギリスで、再び、タイルへの関心が喚起されたのは、ゴシック・リバイバルの流れを受けて、ハーバート・ミントンが1828年に中世の象嵌タイルの復刻に取り組んだ後のことである(『タイル・アート』95-96)。
7. ただし、チューブライニング・タイルは、当初は、タイル素地に細い紐状の土を貼り付けて色釉薬を分けていたが、次第に金型でタイル素地を押して畝を作る方式をとった(『世界のタイル・日本のタイル』52-53)。従って、前者の場合においては、タイル素地の製造とタイル装飾の分業は可能である。
8. イギリスやオランダから専らタイルを輸入していたアメリカが、タイル生産に本格的に乗り出す契機となったのは、フィラデルフィアで1876年に開かれた百周年記念万博の刺激によることは様に指摘されている(Barnard 84-85; Bruhn 7)。John Low は、その翌年には、J. & J. G. Low Art Tile Works を設立し、実際にタイルの製造を始めた1879年5月のわずか5ヵ月後には、シンシナッティ展覧会で銀賞を受賞し、1880年9月のクルー(Crewe, Cheshire, England)での展覧会では、ヨーロッパの名立たるライバルを抑えて金賞を受賞している(Barnard 87; Van Lemmen 98)。機械を使用しながらも、元々のデザインが手で造型されたアメリカのタイルは、競合するイギリスのタイルの輸出に打撃を与えるほどになっていたことが指摘されている(Barnard 115 - 16)。
9. 因みに日本のタイル研究家の山本正之は、50余年をかけて、タイル史を絢爛と彩る世界各地のタイルを古代エジプトの時代から順に約6000点収集し、それらは、1991年に愛知県常滑市に寄贈され、INAX が管理を任されて、遂に1997年4月に日本で初めての「世界のタイル博物館」が開館した。しかし、ここでは、装飾タイルの歴史の最後を飾るアメリカのタイルは、唯一欠落している。
10. 1983年に、Dave Rago は、アメリカでは、過去十年以上の間に人々の関心を集めたのは、アート・ポタリー(美術品としての壺などの陶磁器)であって装飾タイルでは決してなかったが、その状況が急速に変わりつつあることを述べている(*The Antique Trader* 373)。
11. これらの手作りタイルで最も良く知られているのが、Rookwood Pottery (Cincinnati, Ohio, 1880-1965)とGrueby Pottery (South Boston, Massachusetts 1898-1911)である。ただし、Grueby のタイル生産は Grueby Faience And Tile Co. の下で1920年まで続けられている。
12. 例えば、ラーゴは、ビーバー・フォールズ社の最大の財産の一つは、アイザック・ブルームだと言い切っている(*The Antique Trader* 373)。

13. 他にアメリカで人物（肖像）タイルのデザインで有名なアーティストは、J. & J. G. Low Art Tile Works の Arthur Osborne, Trent Tile Co. でブルームの後任となった William Gallimore, American Encaustic Tiling Co. の Herman Mueller が挙げられる。
14. これらの三つのタイル会社が生み出したタイルの多くは、Norman Karlson の *American Art Tile 1876-1941* (40-46, 57-58)と、同著者による *The Encyclopedia of American Art Tiles, Region 1 & 2* (165-173, 176-197)に写真掲載されている。
15. プロヴィデンシャル社から出され、ブルームの作であることが判明している老人をモチーフとしたレリーフ・タイル（通称「ミケランジェロ」）は、彼のタイルの中でも恐らく最も人気があったものらしく、フラクスマン・タイル工房から同じものが出されているだけでなく、トレント社からも酷似したタイルが出されており（Barnard 97）、また、更には、同じアメリカのトロピコ社からも同一のタイルが出されていることがわかっている（Perrault 13, 19）。
16. パーナードは、アメリカのタイルにおいてイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動の最上の結果が得られたとする20世紀初頭の E.A.Barber の認識を紹介している（Barnard 115）。
17. これらの御寝室のタイルと全く同じ三種類の6インチタイルは、1907年に青森県弘前市に建築された木造の洋風建築である旧弘前偕行社（2001年に重要文化財指定）の暖炉に用いられている（『日本タイル博物誌』20[ただし、同書においては、「旧第八師団偕行社」と記されている]。因みに、嘉仁皇太子は鳥取行啓の翌年の1908年に此处に一泊している）。旧弘前偕行社の暖炉では、小鳥の模様のタイル（図7参照）を2枚ずつ、両側上部に使用してある。このタイルの四隅に描かれた葉を三方に配置した意匠が、水仙の模様のタイルの上部二隅の意匠と同じであることから、これらのタイルは、暖炉の飾りタイルとして、一揃いでイギリスから輸入されたものであることがわかる。仁風閣と同じく1907年に建設された旧弘前偕行社の暖炉に小鳥の模様のタイルが合計で4枚使用されていることから、仁風閣の御寝室のタイルも同じセットであった可能性が高い。（現在は、御座所の縁飾りのタイルの複製が、もう一枚の6インチタイルが入るべき隙間を、左右それぞれ埋めているが [図6参照]、これには必然性はない。）しかしながら、恐らく、イギリスのタイル会社が意図した小鳥の模様のタイルの配置は、旧弘前偕行社の暖炉の飾りタイルのように、両側に二つずつ、続けて並べてしまうのではなく（これでは、視覚的にも重複するので効果的とは言えない）、本来は、水仙と壺（とグリフィン）の模様の対のタイルを上下で均斉をとって挟むように配置されていたと考えられる。（日本人の感性では、水仙が入った壺を一番下に持って来るのが自然だったのであろう。旧弘前偕行社の設計と施工は地元の棟梁の堀江佐吉の請負であると言われている。）仁風閣の御寝室タイルの配置が、恐らく、イギリスのタイル会社の意図に沿ったものであったであろうことは、御座所の暖炉に当初のままの状態が残っていたタイルが、男女の肖像タイルを中心に据えて、それを挟むように花模様のタイルが上下にシンメトリカルに設置されていることに窺える。
18. これに最初に気づいたのは、夫の和田隆臣である。氏は、Lockettの本の図版の中（Lockett 210）に仁風閣の断片タイルの意匠と同じデザインがあることを私に指摘した。
19. 仁風閣の保存修理工事の終了後に暖炉の大理石も発見されており、海百合大理石が「謁見所」のもので推定されている（『保存修理工事報告書』68）。
20. ただし、『明治の洋館100選』においては、市指定文化財となる前の「旧十七銀行大川支店」の名称で掲載されている。

引用文献

<邦文献>

- 秋山英治, 『仁風閣物語 - 歴史とその周辺 - 』, 伊藤出版, 1983 .
- 阿木香, 新見隆, 日野永一, 山本正之, 伊奈英次(撮影), 『日本タイル博物誌』, INAX, 1991 .
- 伊藤康晴, 岸田朋子(編集協力), 『仁風閣の周辺 - 白亜の洋館と池田侯爵家のあゆみ - 』, 仁風閣, 2004 .
- 小見康夫, 宮崎興二, 吉村典子, 『世界のタイル・日本のタイル』, 世界のタイル博物館編, INAX, 2000 .
- 鈴木博之, 半村隆嗣(写真), 『明治の洋館100選 今見ておきたい, 全国に残る名建築』, 講談社, 1992 .
- 鳥取市教育委員会, 『重要文化財仁風閣保存修理工事報告書』, 文化財建造物保存技術協会編, 鳥取市役所, 1976 .
- 藤森照信, 増田彰久(写真), 『西洋館デザイン集成 第二巻 暖炉, 飾り金具, 扉, ベランダ』, 講談社, 1988 .
- 山本正之, 前田正明, 鈴木博之, 村松貞次郎, 『ヴィクトリアンタイル 装飾芸術の華』, INAX, 1985 .
- ノエル・ライリー, 『タイル・アート 世界の壁面を飾った小さな美術品』, 棕田直子訳, 美術出版, 1990 . (Noël Riley, *Tile Art: A History of Decorative Ceramic Tiles*, London: Quintet, 1987 .)

<外国語文献>

- Barnard, Julian, *Victorian Ceramic Tiles*, London: Studio Vista/Christies, 1972.
- Bruhn, Thomas P., *American Decorative Tiles 1870-1930*, Storrs, Connecticut: the William Benton Museum of Art (University of Connecticut), 1979.
- Godden, Geoffrey A., *Encyclopaedia of British Pottery and Porcelain Marks*, London, Barrie & Jenkins, 1964.
- Graves, Alun, *Tiles and Tilework of Europe*, London: the Victoria & Albert Museum, 2002.
- Karlson, Norman, *American Art Tile 1876-1941*, New York: Rizzoli International Publications, 1998.
- , *The Encyclopedia of American Art Tiles, Region 1 & 2*, Atglen: Schiffer Publishing, 2005.
- Lee, Dave, *The Wade Dynasty*, Woking: Kudos, 1996.
- Lockett, Terence A., *Collecting Victorian Tiles*, Illustrations by Geoff Taylor and Stephen Yates, Woodbridge, Suffolk: Antique Collectors' Club, 1979.
- Morse, Barbara White, 'Tiles made by Isaac Broome, Sculptor and Genius', *Spinning Wheel*, Jan./Feb., 1973, 18-22.
- Perrault, Suzanne, *The Perrault-Rago Gallery Presents The Fourth Annual Summer Tile Show (Tile Exhibition Catalogue)*, Lambertville, NJ: the Perrault-Rago Gallery, 1997.
- Prescott-Walker, Robert, E.J. Folkard, F.J. Salmon, *The Wade Collectors Handbook*, London: Francis Joseph, 1997.
- Rago, Dave, 'American Art Pottery', *The Antique Trader Weekly: Annual of Articles on Antiques*, vol. XV, Dubuque: Babka, 1983, 373-74.
- Sigafoose, Dick, *American Art Pottery, A collection of pottery, tiles, and memorabilia 1880-1950, Identification & Values*, Paducah, Kentucky: Collector Books, 1998.
- Van Lemmen, Hans, *Tiles, A Collector's Guide*, Souvenir Press, 1979.
- , *Victorian Tiles*, Princes Risborough, Shire Publications, 2000.

(2005年10月21日受理)